

書評 フッサール「ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学」
—生態学と数学

大垣俊一

「人間は不可能にぶつかるとうすぐにあきらめてしまうのが常である。不可能、それは石の壁ということだ。石の壁とは何か。それは自然の法則であり、自然科学の法則である。それはつまり数学である。君たち人間はサルから進化したのだという証明を見せられたら、しかめっ面をしたって始まらない。なるほど、さようで、と言って引き下がるより他はない。それが数学なのである。うっかり口答えしようものなら、何を言うか、と逆ねじを食わされるにきまっている。口答えは無用だ。それが二二が四ということだ。自然は君に物をたずねてなんかいはいしない。自然は君の望みなんぞ取り合わないし、法則が君のお気に召そうと召すまいと、自然の知ったことではない。君はただ自然をありのままに受け入れなければならぬ。従ってその結果をも、すべてありがたく頂戴するべきである。壁はすなわち壁である。…なぜか私はこの法則が気に入らない。にもかかわらず、自然の法則や数学が私に関係があるとは、何たることだ。もちろん、私は自分の額でこの壁をぶち抜くことはできないだろう。そんな力はあるわけがない。けれども私は、それが石の壁であって自分には破る力がないというただそれだけの理由で、万事あきらめてそれを受け入れるようなことは、断じてしないであろう。」¹⁾

今回は現象学の創始者フッサールの、「ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学」(細谷恒夫編集「ブレンターノ・フッサール」中央公論社 世界の名著 51 所収)をとりあげる。現象学の難解さには定評がある。にもかかわらず今回あえて本書の紹介を試みた理由は、大きく分けて二つある。一つは、私がこれまで折にふれて接してきて、また自分自身の中にも持っている「科学批判」との関係である。近代自然科学が人間の物の見方を狭め、人間に本来備わっている豊かな可能性の芽を摘んでいるという主張は、とりわけいわゆる「文系」の人々からしばしば呈示される。科学の一分科たる生物学にかかわる私もそういった批判を受けることがあり、ある時には「人間は貝ほど単純ではない」と言われたこともあった。冒頭に掲げたドストエフスキーの一文は、その種のいらだちを端的に表現したものと言えよう。

こうした見方には、私自身共感するところなしとしないが、突きつめていけば筋違いなものと感じている。科学はもともと人間の思想や存在すべてを制覇しようとしているわけではない。かつてそのようなことを言った人がなかったわけではないが、科学研究者の多くは、科学が扱うのは限定された(しかし実り豊かな)‘一部’であることを了解している。科学の法則が人間の存在そのものさえ規定し始めたという現象があるとすれば、それは‘一部以外’あるいは‘全体’を扱う哲学者や‘文系’が、それに匹敵する成果を生み出してこなかったことの結果であり、それをふ

まえない批判は、自らの無力を棚に上げた八つ当たりには他ならない。どうせ科学批判を聞くのなら、私のこのような反論を覆すほどの充実した主張を聞きたい。それはすなわち「科学でなくて何なのか」を示してもらおうということである。フッサールは数学者として出発し、論理学の著書を成したあと現象学を展開した。その立場から晩年に科学批判の講演を行い、それをまとめたのが本書である。近代科学や、その根幹をなす数学に精通した著者の主張には、ある種の説得力を期待することができる。

もう一つは、私自身の専門分野である生態学における、数学の使用にかかわる動機である。生物学的データを数値化するという事は既に百年以上前から行われてきたが、特に最近の生態学研究においては数式が多用され、その高度化、難解化が著しい。しかしその一方、それに見合う明快で実質的な成果（たとえば考古学におけるDNA分析の導入のような）が得られているかといえば、私自身は疑問である。フッサールは、数学的世界観に鋭い批判を加えた人として知られている。現象学の紹介書には、次のようにある。「数学や論理学は、次第に現実性を離れて、可能性の天空に舞い上がって行った。さらにまた、数学に依拠して成立した近代自然科学も、同様に天空に舞い上がって行った。そして数学や論理学や自然科学があまりに天空に舞い上がった19世紀後半、疑念が生まれてきた。それらは、依って立つ基盤を見失ってしまったのではないだろうか。この疑念を、最も深刻に感じ取ったのがフッサールだった。」²⁾ この言葉は私の抱く疑問に通じている。

哲学の素養のない私にとって、科学哲学関係の書物を紹介する時の気分は必ずしも明るくない。理解不足から来る誤りや軽薄な解釈は必至であろう。しかし私が専念している科学に対して、「おまえはまちがっている」と言われてそのままに過ごすこともできない。目一杯やって誤るのは、それはそれでしかたがない。今回もまた、ポパーの次の言葉を指針として踏み込むことにしよう。「我々は自らの誤りを通じてのみ学びうる。失敗しない者に進歩はない。」³⁾

現象学

フッサールの科学批判は現象学の立場から成される。従ってその論旨を辿るためには、現象学とは何かということ避けて通れない。私の理解では、広い意味での現象学、現象論というのは、人間に知覚される現象をそのままに見ることから出発する思想、ということのように思われる。「そのままに見よ」ということは裏返せば、我々はふだん「そのままに見ていない」ということを意味している。それはどうということなのだろうか。

たとえばテーブルがあり、私たちがそれを長方形とみなしたとする。しかし実際には遠近法で描くように、視覚には台形に映っているはずだ。それを何らかの形で翻訳して長方形として認識し、それに基づき判断したり行動したりする。あるいは建物の陰から車の半分が見えていたとすると、私たちはその部分だけが実体で、後ろのほうは何もないなどとは考えない。自分の住んでいる家を見るにしても、子供

のころの記憶などが染みついている種の雰囲気をかもし出し、他人の見方とは違っているはずである。フッサールは「見られた事物は常に現実に、そして本来的に、それについて我々が見ている以上のものなのである」(p412)と言っている。こうした翻訳プロセスの中には、近代自然科学の概念も混入しているだろう。従ってまず私たちは、このような偏見に満ちた物の見方を捨て(現象学の用語で「判断中止」、ありのままに見ることによって得られるものをとことん追求してみよう、というのが現象学の出発点なのだと思う。そして現象学のもう一つの強い志向性として、学問の成立根拠や物事の本質一般に対する強い関心、ということがあるが、「ありのままに見る」という姿勢が、そこに振り向けられる。

たとえば、ある現象学の紹介書には次のようにある。「(フッサールは)すべての日常的ならびに科学的認識、つまり自然的認識の謎は、意識を超え出た超越的存在を「あり」とする断定、言いかえれば認識する当の主体に真の意味で与えられていない対象者を、ある、と決めてかかる断定に存すると考え、こうした超越論的断定の保留を現象学的還元と呼んだ⁴⁾」。たとえばカントを悩ませたいわゆる「第一アンチノミー」の難問。「宇宙に果てはあるか」という問いをつきつめてゆくと、「ある」としても「ない」としても、共に論理矛盾に至る⁵⁾。しかしそれも結局、宇宙の果てとか時間の始まりなどという、誰も見たことも感じたこともないようなもの、つまり「認識する当の主体に真の意味で与えられていない対象物」を、「物には限りがある」「始まりがある」という偏見にからめとられて考えるところから生ずる混乱なのかもしれない。物事をありのままに見るなら、こうした「謎」そのものが消滅する道理である。

あるいは現象学の重要なテーマの一つに、主観と客観の問題がある。客観的事物というのは、確かに存在していると考えるのが实在論、唯物論で、これは私たちの一般常識と言っている。科学は強固にこの立場に立っている。一方、自分に認識されないものは存在しないのと同じこと、認識されたもののみが存在すると主張するのが独我論とか観念論と呼ばれる立場である。現象学は客観的事物の存在を否定するのではないが、世界をありのままに見るという立場から、いったん独我論的立場に立ち、主観／客観問題に迫ろうとする。そこで問われるのは、なぜ人間は客観的事物あるいは外部世界の存在を確信しているのか、ということである。別の解説書によれば「私たちが知覚と呼ぶ意識表象には、他のものとは決定的に違う性質がある。それは想起、記憶、想像などが、ほぼ意識の思考力によってそれを遠ざけたり呼び寄せたりできるのに対して、知覚だけは、常に意識の自由にならないものとして現れるという点である。…自我を超えて自我の自己原因(結果?)でないものとして現れるこの知覚こそ、自我に、自我ならざるものが確かに外側に存在することを告げ知らせる唯一の根拠となるのである。」⁶⁾ 想像などの思考活動は、強く自己の意識の支配下にあるのに、知覚はそうではない。見たいものも見たくないものもかまわず目に飛び込んでくる。だから我々の自我は、これをちょっと違うぞと感じ、ゆえに「外に何かある」と認めざるを得ないのだという。このメカニズムが合っているかどうかはともかくとして、様々な偏見を排し、ありのままに自己を見つめた結果として生まれてくる発想であることは認めてよいように思われる。こうし

て現象学は、その独我論的立場から、認識論、論理学、心理学、自然科学といった様々なテーマに挑んで行こうとする。

本書の構成ーフッサールの科学批判

この著作はもともと「ヨーロッパの学問の危機と心理学」と題して、1935年にブラハで行われた講演記録に基づく。心理学、という言葉が入っているのは、もともと現象学は心理学との結びつきが強く、フッサール自身、初期には現象学を「記述心理学」と呼んでいたこと関係するらしい。この講演の初めの方で、フッサールは次のような現状認識を述べる。「我々はまず、前世紀の終わりごろから現れた、諸学に対する一般的な評価の転換ということから議論をはじめよう。その評価の転換というのは、諸学の学問性に関するのではなく、むしろ学問一般が、人間の生にとって何を意味してきたか、また意味することができるか、という点に関してである。19世紀の後半において近代人の全世界観はもっぱら実証科学によって規定されていたし、また実証科学による繁栄に幻惑されていたが、この世界観の変更は、純粋な人間性にとって決定的な意味を持つ問題から無関心に目をそらすことを意味していた。単なる事実学は、単なる事実人を作る」(p363)。「しかしもし諸学がこのように、客観的に確定しうるものだけを真理と認めるのであるならば…世界と世界に生きる人間の存在は、真に意味をもちうるであろうか」(p364)。近代物理学が目ざましい成果を挙げつつあった20世紀初頭、既にフッサールは、そうした実証主義的価値観が人間の生を貧しくしていると批判している。科学ないしそれに類する思想は、かつては人間性の解放に寄与したことがあった。たとえばルネサンスである。「人間への問いと内的に連関している限り、学問はルネサンス以来全く新たに形作られたヨーロッパ的人間に対して、ある意味を要求することができた。否、われわれの知るところでは、学問はこの人間性の再建に対して指導的役割さえ持ちえたのである」(p365)。しかし今の科学はそうではない。フッサールはこうした現状に至った経緯を、ガリレイ、デカルト、ヒューム、カントらの思想を辿りつつ解き明かそうとする。

まずガリレイがとりあげられる。ガリレイの有名な言葉、「自然という書物は、数学という言葉で書かれている」は、ここでは引用されていないが、この言葉に象徴されるガリレイの数学的自然観を、フッサールは本来あるべき自然観のすりかえであると批判する。「既にガリレイにおいて遂行されていたのであるが、数学的に規定づけられていた理念的なものの世界が、我々の日常的な生活世界に、すなわちそのみが唯一の現実的世界であり現実の知覚によって与えられそのつど経験された、また経験されうる世界に、すりかえられていたことに注意することが重要である。このすりかえは…その後続く数世紀の物理学者たちに受けつがれたのである」(p410)。しかしそうした数学的自然観は、なぜ妥当なのだろうか。その確信の根本には何があるのか。デカルト、ヒューム、カントは、それらを追及した哲学者として議論されている。デカルトはすべてを疑った末に「我思うゆえに我あり」

に辿りつき、そこに判断の根拠を得ようとした。カントは実証科学を支える合理性の根拠を疑い、ヒュームはそれを、ただ正しいだけに見えるにすぎない‘擬制’であると断じた。フッサールはそれらの思想のある面は評価しつつ、なお不十分であったと考える。「彼（デカルト）がその目標を射そこねて、判断中止の自我の中で得た最も重要なものを取り出し、そこで哲学的な驚きを純粹に展開することをしなかったことに、彼の思想の一義性は由来している」（p443）。「ヒュームの天才には驚嘆すべきものがあつたが、それにふさわしい偉大な哲学的性格がそれに伴っていないのは惜しいことである」（p 454）。「カントの理性批判という問題提起は前提の問われることのない地盤を持っていて、これらの前提は彼の問いの意味を限定している」（p469）。つまり自明、妥当の判断根拠や、自我そのものの追及が不十分であるとし、それを探求することを、現象学の目的として提起する。「我々は…自明性に立ち返って問いを向けるとき、さらに我々がその自明性を前提として自覚し、それが特有の普遍的で理論的な興味に値することを認めるとき、新しい次元のますます新しい無限の現象が我々の前に開かれ、我々はますます増大する驚きの念によって満たされる。…いかなる哲学も、この主観的なものの領域を主題にしようとはしなかったのであり、従ってその領域を真に発見しなかったのである」（p478）。

続いて、実証科学が抱える問題について言及される。科学には、現時点でうまくいっているように見えるものと、そうでないものがある。つまり、成功しているものと失敗しているものがある。後者の代表が心理学である。「この飛躍的な（科学の）発展は、部分的には明らかに成功したが、他の一部の発展は突然阻止されることになった。これらの科学の一部である心理学の建設に際して、全哲学を問題視させるような謎が立ち現れたのである。…すなわち詳しく言えば、概念の不明瞭さであり、判断する思惟のあいまいさであり、様々の形態の悟性と理性の能力なのであった」（p485）。現象学の紹介書に、次のようにある。「近代の実証主義は、人間の理性は世界の客観を正しく捉えることができる、という新しい確信を強力に打ち出した。…だが人々がこの実証主義をいわゆる人文科学、つまり社会科学や歴史、心理学などにもそのまま適用したとき、面倒な問題が生じてきたのである」⁴⁾。心理学がどう失敗しているか、フッサールは具体的に述べていないが、心理学で用いられている「人間」「想像」「情動」などの言葉が、重要なキーワードであるにもかかわらず、きちんと定義されておらず、従ってそのようなあいまいな概念に基づいて構築される体系そのものに信頼性がない、ということを行っているらしい⁴⁾。それらの用語は、結局現象学的還元によって定義される他はなく、同時に基礎概念を洗い直すという作業は他の分野にも必要とされるから、それを「全哲学を問題視させるような謎」と言ったものであろうか。フッサールの文脈からは離れるかもしれないが、このいわゆる「心理学の失敗」について私自身の印象を言えば、心理学は他の自然科学分科に比べ、かなりいいかげんな感じがする。人間の、同じ行動や心理現象が、フロイト派、ユング派、アドラー派などによって異なった形で解釈され、しかもそれぞれの理論に合致するのだという。若き日のカール・ポパーは、ウィーンで当のアドラーと議論し、彼の理論で解釈できそうもない子供の事例を話したところ、アドラーが自らの理論でたちどころに説明し切ったのを聞いて驚嘆した。しかしこの

ことが「すべてを説明する理論は、結局何も説明していないのではないか」という深い疑念を生み、ポパーによる、科学—非科学の境界設定論に発展する⁷⁾。その一方で、心理学の客観化をめざし、外面的に明確に把握できる指標のみを扱った行動主義心理学も、心理学の可能性を著しく減ずるものとして批判を浴びることになった⁸⁾。

フッサールは、ラッセルらによって発展させられた近代記号論理学も、「素朴」として批判する。「近代の数学的論理学者が、これこそ真に学的な哲学という名のもとで形成できると信じている、完全に自立的と考えられている論理学も、素朴性を脱していないと言わねばならない。この論理学の明証性は、普遍的な生活世界的アプリオリからの学的基礎づけを欠いている。…この徹底的な根本学がひとたび成立したときになって初めて、上述した論理学自体も学になりうるのである。それまではこの論理学は、今までと同じく、根拠もなく中空に漂うのである」(p511)。つまり、記号論理学において客観的なのはその過程のみで、基礎部分(数学での公理に相当するもの)については確証がない。そうであるかもしれないしそうでないかもしれないものに寄りかかっているから、宙に浮いている、と言うのである。その根本にかかわる概念として、ここで使われている「生活世界」という言葉は、フッサールの現象学の根本概念の一つで、科学批判のキーワードでもある。再び紹介書から引用する。「実証主義が思い描いた世界客観の真とは、現象学的には、決して絶対的なものとしては定立し得ない一つの超越、つまりドクサ(臆見)にすぎない。そしてこの超越としての客観は、その確かめの根拠をただ生活の中での具体的な人間の意識のありようにだけ持っている。つまり、近代科学のどんな客観的理念も、その根拠をただ生活世界の人間の内在のうちだけに持つのである。世界客観の真が生活世界を規定するという考え方は、それゆえ本来の関係の全くの逆転なのだ⁴⁾。自然は数学で成り立っているという。人間は遺伝子に操作される生存機械なのだという。ではなぜ、我々はそれを妥当だとか合理的だと思うのか。また、合理的だから受け入れるべきだと感じるのはなぜなのか。そのような判断をしている自分とは、自我とは何なのか。その根本には我々が生活しているこの世界があり、その世界における常識感覚に従って、人はもろもろの妥当性を認定しているのではないのか。それなのに、その部分をないがしろにして構築された体系を基礎に据えて世界を見るというのは、話がさかさまだというわけである。

それを解決するための現象学の方法は、本書の後半部で要約的にふれられている。その第一歩は「判断中止」である。「自然的な世界生活は世界を妥当させているが、そのような能作(働き)をしている生は、自然的な世界生活の態度(=科学)では研究されえない。それゆえにこそ、全面的な態度変更を、すなわち全く他に類のない普遍的な判断中止を必要とするのである」(p519)。つまり、我々の知覚にまとりついた様々な偏見を取り去って、まず物事をありのままに見る、という現象学の基本に戻る。そしてそこから思考を積み重ねることによって、人間活動の様々なテーマについて、新しい哲学の地平が開けるといふ。その手法や成果の一部(と、私が考えるもの)については、先の現象学の紹介のところでふれた。実際のところは「イデー」など、フッサールの他の書によるべきだが、私はそれらを読んでい

ないので、これ以上の論述は控えたい。ただ、現象学はフッサール以後多くの思想家に受け継がれ、世界的規模で研究が進められて、現在でも関連の様々な国際会議の開催や国際論集の発行が続けられている⁹⁾ことを紹介するに止める。

生態学と数学

一方の極に数学、物理学を置き、他方の極に社会・人文科学を置いたとき、生物学、さらに生物学の中での生態学等マクロ分野は、より後者の極に寄った分野であると思われる。本質的には方法の標準化の程度と論証形式において、ということになるが、表面的には、その差は数学の利用度という形で現れる。私のかかわる海岸生態学の分野では、1980年代の後半あたりから研究における数式の使用が顕著になってきた。初歩的な統計検定などは1960年代から使用されていたが、このころには分散分析が多様化、複雑化し、重回帰、PCA、MDSなどの多変量解析、パス・アナリシス、フラクタルやベイズ主義の応用なども見られるようになった。数式を多用する難解な論文がいわゆる一流紙に数多く掲載され、新しい手法が現れ、それを検討する論文が出て議論される中で、多くは普及することもなく消えて行く。私など、そうした論文のほとんどは理解不能なので、しばらく様子を見ていて、一般的になったものについて仕方なく勉強して使う、というスタンスを取っている。

では、数学が多用されるようになった背景は何か。一つには、データ評価の客観化をつきつめた結果と言えるだろう。確からしいとか確からしくないといった判断は主観が混入しやすく、同じ現象に対して研究者によって意見が食い違うということも起こりうる。統計検定は、それを「誤差からのへだたり」という指標で客観化し、共通の議論の土俵を整えた。そういう意味では、生態学への統計の導入は進歩であり、妥当だったと言えよう。しかし数式の導入は、生態学に別の形の影響をもたらした。具体的に見よう。例えば各地点の群集構造を比較するのに、最も単純には各点で出現する種数を指標とする。これはそこに何種いたということだから、極めて明快である半面、個体数の情報が抜けている。そこで、個体数を入れ込んだ多様性指数が考えられている。その中で比較的多用されるShanon-Weanerの H' は、情報理論に基づき対数を含んで単純ではないが、それでも、一定範囲を歩いたときに行き当たる種の多さの指標であると説明されれば、なんとなく実感はできる。しかしPCA（主成分分析）となると理解は容易でない。グラフ上に散在する各地点のグルーピングは、各点を種と個体数で類別したものであることはわかっても、縦軸と横軸は何を表すのか不明確である。それを推定できる場合もあるが、間接的なものにすぎない。PCAのノンパラメトリクス版ともいえるMDSでは、類似度をもとにした相関マトリクスにから出発して、多次元空間に散在する点を2次元に投影する。こうした複雑な処理を行う結果、PCAやMDSでは、もはや我々が海岸を歩いて感じる多様性とか群集相観に還元した理解は不可能になっている。これらについては環境条件との結びつけも容易でない。まさに冒頭に引用した現象学研究者の言葉通り、数学に依拠する生態学は「現実を離れ、可能性の天空に舞い上がり」つ

つあるかのようだ。

私は最近学会で、ある研究者のポスター発表を聞いていて、不思議な感覚にとらわれた。彼はていねいに自分の研究を説明してくれて、初めは私にもよくわかった。現実のフィールドの現象との対応もつき、この指標は実際にはこう設定すべきではないか、などのコメントもできたのである。しかし数式による説明が積み重なるうちにわけがわからなくなってきた。そして最後に調査地の状態との対応が検証された段階で、そこで生じている食い違いが何を意味しているのか、判断できなくなっていたのである。こうした場合、今までなら自分の理解不足とあきらめたものだが、この時にはちがう印象をもった。もしかすると、発表者自身わかっていないのではないか？。わかっていないというと語弊があるが、私がイメージするようなわかり方はしていないのではないか。発表者は確かに、出発点としては現実のフィールドから発想しただろう。しかし途中は数学的に思考し、最終的な結果を再びフィールドに戻した。これはそもそもそういう研究パターンなのではないか。生態学の数学化を推し進める人々が、意識するしないは別としてたぶん模範としている精密自然科学、たとえば量子論などでは、現実感覚との対応ということはもはや問題にされない。重力で空間がゆがむとか、光は粒子であると同時に波であって、一つの光子が同時に二つの穴を通過したと考えなければこの現象は説明できないなどという事は、すでに我々の日常感覚を超えている。しかし数式的にはそうなのであり、しかも実験によって現実との対応もつけられている。常識や現実感覚、フッサールの言う「生活世界」は捨象され、まさに「自然という書物は数学という言語で成り立っている」世界。ここでは数学的感覚こそが常識である。研究者は数式で物を考え、実験で理論の妥当性を検証する。従ってこのポスター発表の場合にも、途中が現実から遊離していても、最終的にフィールドとつき合わせている限り、一つの可能な研究スタイルと言うこともできる。

してみると我々は今、一つの岐路に立っているのかもしれない。我々が直面しているのは、従来型の、フィールドに密着し常識的論理構成に依拠して進める生態学と、数式を多用し量子論的方法論に基づく生態学への分裂である。数学化を押し進める人々は、直接には客観化の追求とか、マクロ研究者のコンプレックスー「単純」「非科学的」などの批判への、難解化による対抗ーなどを動機としているかもしれないが、結果として彼らの方向性は、生物的自然観の転換まで進む可能性を秘めている。

フッサールは自然科学の基礎にあるあいまいさを突き、その基礎は結局のところ生活世界の感覚に依拠するしかないことを説いて、科学的自然観が人間の日常感覚を縛ることのナンセンスを主張した。それはそういう話の流れとして納得できる。しかしだからといって、私は今自分がやっている自然科学の研究をやめ、自我の探求に向かおうという気はない。あいまいさを残しながらでも、科学の研究は成立する。またこのこと自体は、私の科学批判者への反論、「科学でなくて何なのか」への答えになっているとも思わない。それは進展しつつあるという現象学の研究から、何が得られるのかにかかっている。しかしそのときに気になるのは、現象学の難解

さ、ということである。たとえば本書の中の次のような記述はどうか。「その統合的全体性において、我々は初めて、世界が総合的に結合された能作の探求しうる普遍性の相関者としてその存在的な構造の全体性におけるその存在意味とその存在妥当性とを獲得してくるということ、およびその仕方を見出すのである。」(p516) 「世界は絶えず私の知覚する意識生命の統一の中で流れてゆくが、注目すべきことには、当の事物が端的に現存するという意識を生み出す特別な多様性の調和的経過は、個々の場合について見れば、必ずしも起こらないということである。」(p537) 私はこれらの文を、5, 6回づつ読んだがわからなかった。ある程度は訳の問題や、私自身が現象学特有の概念や用語に通じていないせいもあるだろうが、それだけではない。このわかりにくさこそ、かつて論理実証主義が「火の中に投ずるべき」¹⁰⁾と激しく批判したそのことなのであり、分野の発展にとって決してプラスの効果をもたらさないだろう。私は、難解さの中にこそすぐれた発想がきらめく可能性を否定するものではない。しかし極端な話、書いた本人にしかわからない文章があったとしてそれが意味を持ちうるだろうか。何も書かないのと同じであろう。さらに難解さは学を志す者の門戸をせばめ、人材の枯渇を招く。19世紀以来、哲学が科学に圧倒され続けてきたという事実があるとすれば、ここにその一つの大きな要因があるはずである。フッサール自身は「自分たちの聞きたいものだけしか聞かないような行きずりの読者や、聞き手の取り違えに対してはどうしようもないが、そのような人は哲学者にとっては、どうでも良い大衆にすぎない。我々がめざして語りかける少数の人は、おそらくそのような懸念を退けることができるであろう」(p507)と、開き直りともとれるようなことを言っているが、それでよいのだろうか。

しかし一方、生態学という局面で考えれば、フッサールの主張は私にとって示唆に富んでいる。フィールドに密着し、常識的論理構成に依拠する生態学と、数学的に抽象化された生態学のいずれかとなれば、私は迷いなく前者を取るし、自然科学の中でも社会・人文科学に近い生態学は、仮に後者の道に進んでも、結局かつての心理学の徹を踏むという見通しを持っている。その意味で私は、たとえ曲解、我田引水と言われようとフッサールの「生活世界」の概念が好きだし、日常感覚を基礎に据えた学問の構成という方向性に、共感するのである。

引用文献

- 1) 松浪信三郎 1962 実存主義 岩波新書
- 2) 谷徹 2002 これが現象学だ 講談社現代新書
- 3) ポパー 1961 歴史主義の貧困 久野収・市井三郎訳 中央公論社(原著1960)
- 4) 木田元 1970 現象学 岩波新書
- 5) 石川文康 1995 カント入門 筑摩新書
- 6) 竹田青嗣 1989 現象学入門 NHK ブックス
- 7) 大内義一・森博 1971 訳者あとがき in「ポパー 科学的発見の論理」恒星社厚生閣

- 8) クラフト 1990 ウィーン学団 寺中平治訳 勁草書房 (原著 1950)
- 9) 新田義弘 1998 現象学 岩波哲学思想事典 岩波書店
- 10) ライヘンバッハ 1954 科学哲学の形成 みずず書房 (原著 1951)